

性は3度の静脈炎（深部静脈血栓症）、感染（肺炎）、心不全を各1例認めた。治療関連死亡は生じなかった。

【結語】full dose の THP-COP 療法は強い骨髄抑制を生じ得るが、適切な補助療法の併用により比較的 safely に実施可能であることが示唆される。現在、他施設共同研究での登録を終了し、安全性、完遂率、寛解率などを解析中である。

## II. 特 別 講 演

### 「高齢者の急性骨髄性白血病」

東京都老人医療センター血液内科部長

森 真由美 先生

## 第29回新潟糖尿病談話会

日 時 平成12年3月25日（土）  
午後1時30分より  
会 場 新潟ユニゾンプラザ大会議室（4F）

### I. 一 般 演 題

#### 1) 当科外来における metformin の有効性について

河内 文女・長沼 景子  
鈴木亜希子・五十嵐智雄  
丸山誠太郎・石川 真紀  
上村 宗・金子奈々子  
金子 晋・羽入 修  
大山 泰郎・中川 理（新潟大学）  
相澤 義房（第一内科）

今回我々は、強いインスリン抵抗性を伴う2型糖尿病に BG 剤を使用し抵抗性を改善できた症例を経験した。そこで当科外来で血糖コントロールが不十分な2型糖尿病患者35例を対象として、3カ月以上 metformin を投与し、BMI、平均血圧、HbA1c、TC、HDL-C、LDL-C、TG、HOMA、PAI-1について検討した。投与開始後は有意な HbA1c の低下を認め、3ヶ月後に効果のある症例は6ヶ月後も有効性が維持できた。BG 剤は肥満群に有効とされているが、非肥満群においても HbA1c の改善を認めた。BG 剤はインスリン分

泌を介さず血糖降下をもたらすため、インスリン分泌が低下した2型糖尿病にも効果があると考えられた。今後は BG 剤の二次無効の有無、合併症への影響など長期的観察が必要と思われた。

#### 2) 膵癌を併発した糖尿病の10例

小林 良太・佐々木夏恵  
宮島 衛・奥泉 讓  
田村 紀子・百都 健（新潟市民病院）  
田中 直史（第二内科）

糖尿病の経過中に膵癌が発見された、当科の関係した10症例の特徴を検討した。過半数に腹痛の訴えがなく、急速に血糖コントロールが不良となった例が目立った。糖尿病診断から1年以内に膵癌が発見された2例については、膵癌による二次性糖尿病であったと考えられた。10例中外科的根治術適応は2例のみで、全例完治はしなかった。

当科教育入院患者（'95 - '99）1100例に施行した腹部超音波検査で、9例（0.8%）に膵癌が発見された。一般の膵癌罹患率等から検討し、スクリーニング目的の腹部超音波検査では糖尿病患者は非糖尿病患者に比べ膵癌を発見される頻度が高いと考えられた。

糖尿病初発例、経過中の急な血糖コントロール不良、腹痛や体重減少を訴える例には直ちに膵癌の否定を行う必要があり、日常診療上、血糖コントロール、慢性合併症に対する全身の管理と共に、悪性腫瘍の検索にも一層心がける必要があると考えられた。

#### 3) 多発性筋炎（PM）、重症筋無力症（MG）、胸腺癌を合併した抗 GAD 抗体強陽性の1型糖尿病

佐々木夏恵・小林 良太  
宮島 衛・奥泉 讓  
田村 紀子・百都 健（新潟市民病院）  
田中 直史（第二内科）

症例は61才の女性。家族歴に糖尿病、自己免疫疾患なし。昭和63年、口渇、体重減少、随時血糖 516 mg/dl、尿アセトン体陰性から糖尿病と診断された。グルカゴン負荷6分後の血中 CPR は 1.8 ng/ml と低反応で、当初からインスリン治療を継続。平成6年12月全身の筋肉痛出現、筋力低下、CPK、LDH の上昇、EMG、筋生検より多発性筋炎と診断しステロイド投与を開始した。平成8年3月より夕方に眼瞼下垂あり、MG が疑われたが EMG が非典型的で確認がつかず経過観察。平成

10年1月胸腺癌で胸腺摘出術を施行。平成11年9月Ach-R抗体0.7nmol/l, テンシロンテスト陽性からMGと診断された。平成12年1月血糖コントロール不良で入院。朝食前後のCPR0.2ng/ml以下, 抗GAD抗体83000U/mlからSPIDDMと診断した。一日4回の頻回インスリン注射にてコントロールが改善し退院した。本例はSPIDDMにPM, 胸腺癌, MGと多彩な自己免疫疾患を合併した希な症例だった。

#### 4) 妊娠後期から良好な血糖コントロールが得られたCSII治療中の糖尿病妊婦の一例

宗田 聡・土屋 博久 (長岡赤十字病院)  
鴨井 久司・金子 兼三 (内科・糖尿病セ  
ンター)  
佐々木英夫

症例31歳女性。'92年6月糖尿病を発症。東京某院にてインスリン治療を開始。同年11月新潟の某院に転院となった。強化療法を施行したが、血糖コントロールは不安定で'96年3月よりCSIIを導入した。HbA1c平均は10%以上で、コントロールは不良だった。'99年3月3日受胎許可がないまま妊娠7週であったことが判明。本人が強く妊娠継続を希望したため、3月8日入院管理となった。食事は一日1840kcal, 基礎インスリン注入量0.84U/h, ボーラスは(15-13-16)でも各食前血糖は200~300mg/dlと高値であった。9月3日妊娠33週に妊娠管理, 血糖管理目的に当院転院となった。6分食, CSII基礎注入量は0.92U/h, ボーラスは(8-6-4-5-6-6)に調節したところ血糖改善を認めた。妊娠40週2日に4180gの女児を経膈自然分娩し, 子供は比較的過体重であったが, 外見的奇形や, 先天性心疾患は認められなかった。厳格な血糖コントロールによって血糖が改善され, 自然分娩を行った一例であった。

#### 5) 新潟県における小児期発症1型糖尿病の実態

菊池 透・内山 聖 (新潟大学)  
小児科

新潟県内の高校生以下の1型糖尿病患児を診療している医療機関にアンケート調査を行い, 男33名, 女25名の回答を得た。10万人あたりの有病率は12.1人, 発症率は1.6人であった。発症時期は幼児期と思春期に多かった。50例は多飲多尿, 体重減少等の有症状で発症していたが(昏睡は2例), 8例は尿糖陽性で発見された。初期治療にインスリン静注から開始した例, および皮下注

から開始した例は半数づつであった。1年毎の平均HbA1cは男7.9%, 女8.5%で, 中学生女子では9.2%と不良であった。HbA1cの規定因子として, 女では悪化因子; 年齢が高いこと, 改善因子; 自己注射回数が多いこと, インスリン皮下注からの治療開始, が推測された。男では悪化因子の推測はできなかった。小児期, 特に思春期女児の血糖コントロールの悪さを認識し, その問題点を明らかにし, その改善のための介入方法を検討する必要がある。

#### 6) 糖尿病角膜症の2例

齊藤 暢子・大矢 佳美  
松本 重明・太田 正行  
村上 健治・市辺 幹雄 (新潟大学)  
今井 和行・吉澤 豊久 (眼科)

背景: 1970年代後半より増殖糖尿病網膜症に対する硝子体手術が盛んに行われるようになり, 術後の難治性角膜障害が目されるようになった。今回我々は糖尿病角膜症の2例を経験したので報告する。

目的: 糖尿病角膜症の要因を症例ごとに検討する。

症例1: 76歳男性, 1995年11月, 両眼の視力低下にて近医眼科受診, 糖尿病網膜症の診断にて経過観察するも糖尿病黄斑症が増悪し, 1997年4月右眼硝子体手術施行。術中に機械的に角膜上皮剥離を行った。術後, 角膜びらんの治癒が遷延しコンタクトレンズ装着, アルドース還元酵素阻害剤の内服により軽快した。症例2: 48歳男性, 1997年7月, 両眼の視力低下にて近医眼科受診。糖尿病網膜症の診断にて汎網膜光凝固をうけた。1998年3月より左眼角膜びらん, 瞬目の減少を認めた。1998年5月左眼硝子体手術施行。術後, 角膜びらんの治癒が遷延し, コンタクトレンズ装着, 刺激の弱い点眼に変更し軽快した。

結論: 症例1は角膜上皮および基底膜の異常が, 症例2は角膜知覚低下によるドライアイが角膜上皮障害の主な原因であると考えられた。

#### 7) 糖尿病網膜症に続発した血管新生緑内障に対する手術成績

佐野 友紀・中村 朝子 (済生会新潟第二病院)  
安藤 伸朗 (眼科)  
福地 健郎・岩田 和雄 (新潟大学)  
眼科

目的: 糖尿病で失明する原因の一つとして, 血管新生